

研究論文

エドモンド・スペンサーと
エリザベス朝イングランドにおける諜報文化

Edmund Spenser and Culture of Intelligence in Elizabethan England

溝手 真理

Mari Mizote

要約

本稿は、エリザベス朝の諜報文化の中に、エドモンド・スペンサーを位置づけて論じるものである。当時ケンブリッジ大学の教育は、詩人とエージェント（＝スパイ）という二重の役割を可能にする技能を授け、パトロン制度は人材をエリザベス朝国家に結びつける忠誠のネットワークを提供する制度的枠組みであった。『妖精の女王』や『羊飼いの暦』といったスペンサーの作品は、文学活動に対するパトロン制度、プロテスタント政治、そして諜報活動が交差する政治的・文化的環境の中で創作されたものであり、その意味においてスペンサーは国家のイデオロギー的枠組みに参加する知的エージェントととらえることができる。

キーワード：エドモンド・スペンサー、エリザベス朝、諜報活動

Abstract

This paper examines Edmund Spenser within the broader Elizabethan culture of intelligence shaped by Sir Francis Walsingham's networks of informants and intelligencers. These networks frequently relied on university-trained men, particularly from Cambridge, whose humanist education provided skills in rhetoric, languages, and discretion—qualities essential to both poetry and espionage. Spenser, a Cambridge graduate, exemplifies this intersection of literature and state service. Through works such as *The Faerie Queene* and *The Shepheardes Calender*, he pursued patronage while contributing to the ideological work of the Elizabethan state. The study argues that Spenser's poetry should not be viewed solely as aesthetic achievement but as a product of a culture rooted in vigilance, secrecy, and loyalty. His allegorical strategies in his verse mirror intelligence practices: the concealment and revelation of meaning, the cultivation of a selective readership, and the reinforcement of values central to political trust. By situating Spenser's writings within this matrix of scholarship, patronage, and intelligence, the

paper reveals how poetry and espionage in the late sixteenth century shared structural affinities, linking literary form to the practices of secrecy and service.

Keywords: Edmund Spenser, culture of intelligence, patronage, scholarship

1. はじめに

エリザベス朝イングランドは、国家による政治的監視が常態化していた監視社会という一面があった。女王エリザベス1世（Elizabeth I）の首席秘書官であり、事実上の秘密諜報機関の創設者とされるウォルシンガム（Sir Francis Walsingham）の指揮のもと、情報提供者や諜報員による広範なネットワークがイングランド国内のみならず、ヨーロッパ大陸全体に張り巡らされていた。そしてこのネットワークは、廷臣や外交官はもとより、行商人や手紙の運び屋、職業的スパイに加え、大学で教育を受け、将来政府の行政官となることを志す若者たちによって構成されていた。

若者たちが大学で受けた人文主義教育は、エリザベス朝の諜報国家において求められる技能、すなわち言語能力、修辞学、神学的議論の素養、暗号解読の才覚などを身につける上で極めて有効であった。特にケンブリッジ大学は、後に詩人や文人として、また政府の行政官として活躍する人材を育成する知的な場であり、諜報活動に従事する可能性を秘めた人材を輩出する場でもあったと考えられる。このような背景から、卒業生や場合によっては現役学生が、情報を収集・操作する諜報員としての裏の顔を持って活躍したと推察することは決して困難ではない。

学問、パトロン制度、そして諜報活動が交差するエリザベス朝の文化的・政治的環境において、スペンサー（Edmund Spenser）とシドニー（Sir Philip Sidney）の存在は特筆に値する。両者は大学における修辞学および神学的教養に育まれ、レスター伯（Robert Dudley, Earl of Leicester）との間にパトロン＝クライアント関係を築いていた。シドニーはプロテスタント的騎士道精神を体現する宮廷人として知られ、オックスフォード大学で教育を受けた。またシドニーには、1572年の聖バーソロミューの虐殺の際にパリのウォルシンガム邸に滞在していたという事実があり、後にウォルシンガムの義理の息子となるなど、政治的・家族的にもウォルシンガムと深いつながりを持っていた。

一方、スペンサーはケンブリッジ大学に学び、詩人として、また行政官として活躍した人物であり、彼もレスター伯の庇護を受けている。彼はレスター伯の知遇を得て、後にアイルランドにおいて秘書官として国家に仕えることとなる。

レスター伯はシドニーの叔父であり、宮廷における強力なパトロンであった。彼の周囲には、プロテスタント政治と諜報活動、監視への積極的関心を共有する人物が集っていた。このような政治的・文化的文脈の中で、スペンサーの文学作品『妖精の女王』（*The Faerie Queene*）や『羊

飼いの暦』(*The Shepherdes Calender*)等は、単なる文学的業績として評価されるのみならず、エリザベス朝の監視社会や秘密諜報活動を反映した文化的産物としても再解釈されうる。

これらの作品には、警戒心、秘密主義、政治的な意味における「忠誠」や「信頼」の構築といった、当時の諜報文化に通底するテーマが潜在的に織り込まれている可能性がある。スペンサーの文学は、エリザベス朝国家の情報戦略と文化的表象との接点を探る上で、重要な分析対象となり得るのである。

本論は、スペンサーを、詩的表現と、忠誠と信頼を基盤とする監視社会を結びつけ融合させた人物、広義の「諜報社会」の参与者として再評価する可能性を探ることを目的としている。スペンサーはケンブリッジ大学における人文主義的教育を通じて修辞学と神学的思考を身につけ、その文学作品に見られる寓意的な表現戦略は、16世紀後半のイングランドにおいて、詩作行為と国家への奉仕がいかに密接に結びついていたかを示す重要な手がかりとなると考えられる。

スペンサーは、エリザベス朝の帝国主義の野心を体现する詩人として作品を創出するだけでなく、レスター伯やウォルシinghamとの信頼関係の基盤となったプロテスタント国家維持に貢献するイデオロギー、すなわち、忠誠と情報管理を重視する国家観を反映・強化する作品もまた創出している。彼の詩的实践は、単なる文学的表現を超えて、エリザベス朝国家の諜報的関心と深く連関する政治的・文化的言説の一部であったと考えられるのである。

2. スペンサーとケンブリッジ：スパイ養成機関

16世紀半ばのケンブリッジ大学における教育課程は、エリザベス朝の国家行政および文学界において活躍する人材を育成する上で、極めて重要な役割を果たした。学生たちは、修辞学、弁証法、神学、古典語（ラテン語・ギリシャ語）を中心とした人文主義的教育を受けたが、これらの学問は単に学術的素養を涵養するのみならず、政治的実務や諜報活動に応用可能な技能を提供するものであった。

スペンサーのケンブリッジでの学修は、“designed to prepare an educated elite for service in government, national and local, the rapidly expanding civil service, as well as the church” (Hadfield 2012, p.57)、すなわち国家に貢献する行政官を養成するための教養教育（リベラルアーツ教育）であった。

いわゆる自由七科と言われる“grammar, logic, and rhetoric”、“arithmetic, geometry, astronomy, and music”、そして3つの哲学研究“moral, natural, and metaphysics”、さらには“mathematics”や“geography”も学んだであろうとされている (p.57)。

修辞学や哲学はすべて原語で教えられており、学生たちはラテン語・ギリシャ語に加え、場合によってはヘブライ語、さらにはフランス語やイタリア語などの大陸諸言語にも習熟することが可能であったと考えられる。これらの言語能力は、傍受された書簡の解説や、カトリック側の神

学的論争文書の分析・解釈において極めて有用であり、諜報活動における実践的スキルと直結していた。

さらに、神学は中世以来ケンブリッジ大学の主要な学問分野であり、宗教的対立が政治的緊張と直結していたエリザベス朝においては、異端審問や扇動的文書の監視といった諜報機関の活動においても不可欠な知識領域であったと考えられる。したがって、ケンブリッジ大学の教育は、文学的創造性と国家への奉仕、さらには諜報活動における実務能力を兼ね備えた人材を輩出する制度的基盤であったと位置づけることができる。

またケンブリッジ大学出身者の経歴を垣間見ると、その大学教育がいかにして諜報活動への道を開いたかを如実に物語っていることがわかる。Robert Hutchinson の *Elizabeth's Spy Master* 付録にウォルシンガムの情報提供者リストというものがある。そのリストには、ケンブリッジ大学出身のフェリペス (Thomas Phelippes) やマーロー (Christopher Marlowe) の名前がある。

トリニティ・カレッジで教育を受けたフェリペスは、卓越した言語能力と暗号解読の技術を有し、ウォルシンガムの下で暗号解読者として活躍した。彼は、スコットランド女王メアリー (Mary of Scots) の処刑を決定づけたバビントン事件において、決定的な役割を果たした手紙の解読を担当したことで知られている。

また、コーパス・クリスティ・カレッジ出身の劇作家マーローも、政府との関係を示唆する記録を残している。枢密院の文書には、彼がケンブリッジ大学を長期間不在にしていた理由として “her majesty good service” (Hutchinson 2006, p.285) が挙げられており、これはウォルシンガムの諜報ネットワークに関連する任務に従事していた可能性を強く示唆するものである。

さらに、セント・ジョンズ・カレッジ出身のディー博士 (Dr. John Dee) は、直接的な諜報員ではなかったものの、ケンブリッジで教育を受けた博学の知識人として、暗号解読、航海術、帝国政策などに関する助言を行い、学問と国家政策の融合を体現した人物である。彼の活動は、知的探究と政治的実務が密接に結びついていたエリザベス朝の文化的状況を象徴するものであり、大学教育が国家の諜報的関心と連動していたことを示す好例である¹⁾。

これらの人物の事例は、ケンブリッジ大学が単なる学術機関にとどまらず、エリザベス朝国家の情報戦略において重要な人材供給源であったことを明らかにしている。この文脈において、スペンサーがペンブルック・ホール (現ペンブルック・カレッジ) で 1569～1576 年の間に享受した教育は、単なる文学的素養の形成にとどまらず、より広範な意味において、国家への人文主義的奉仕の一環として理解されるべきである。スペンサーが学んだ修辞学と神学は、彼の代表作である『妖精の女王』及び『羊飼いの唇』における寓意的な表現戦略の基盤を形成したと同時に、彼をプロテスタント国家のイデオロギーと深く結びつける役割を果たしたと言えるのである。

フェリペスが文献学的訓練を暗号解読技術へと転化させたように、スペンサーもまた、ケンブリッジ大学で培った学識を、政治的意味を内包する詩的表現へと昇華させたと言えるだろう。彼

の作品は、ウォルシンガムが支えたエリザベス朝の諜報国家のイデオロギー的支柱として機能する側面を持っていた可能性がある。要するに、ケンブリッジ大学は、文学者や行政官を育成する場であると同時に、諜報活動に従事する人材の秘密の養成機関としても機能していた。学問、イデオロギー、そして諜報活動が融合することにより、同大学はエリザベス朝国家に奉仕する知的エージェント＝スパイを輩出する制度的基盤となっていたのである。

3. スペンサーとレスターサークル：パトロン制度

スペンサーの初期の経歴は、レスター伯の邸宅、及び彼が率いた政治派閥との関係を抜きにしては理解し得ない。1570年代後半に築かれたこの繋がりによって、スペンサーは文学活動に対するパトロン制度、プロテスタント政治、そして諜報活動が交差する複合的なネットワークの中に位置づけられることとなった。

Haynes (1992) は、レスター伯に関する歴史的資料の多くが破棄されているという事実に言及し、彼が私的にどのような情報組織を有していたかを明らかにすることの困難性を指摘している。その上で、わずかに残された資料から得られる断片的な情報に基づき、詩人スペンサーおよび彼の友人であるハーベイ (Gabriel Harvey) が、レスター伯の情報活動に関与していた可能性について示唆している。Haynes (1992) は、これらの人物がレスター伯に雇われていた可能性を慎重に論じており、当時の知識人と政治権力との関係性を再考する上で重要な視座を提供している。(pp.15-6)

エリザベス朝において、レスター伯は宮廷内で強大な政治的影響力を有していた。彼はプロテスタント国家の防衛および拡張を目的とした諜報活動を積極的に支援し、ウォルシンガムとの連携を通じてその体制を強化した。Archer (1991) によれば、レスター伯はウォルシンガムのパトロンでもあり、彼の政治的・外交的活動を後援していたことが示されている。

また、ウォルシンガムはレスター伯の甥であるシドニーとの関係も深く、1572年の聖バーソロミューの虐殺の際には、シドニーをフランス・パリのウォルシンガム邸に滞在させている。

さらに、両者はエリザベス朝のプロテスタント政策においても同盟関係を築いており、その象徴的な出来事として、1583年にシドニーがウォルシンガムの娘と婚姻関係を結んだことが挙げられる。この婚姻は、政治的同盟を家族的結びつきによって強化する典型的な事例であり、当時の宮廷政治における人間関係の重要性を物語っている。

スペンサーはこの文学活動に対するパトロン制度、プロテスタント政治、そして諜報活動が交差する政治的・文化的環境の中で、詩人としての創作活動を展開した。と同時に、国家イデオロギーの表象者としての役割も担っていたと考えられる。すなわちスペンサーの文学的キャリアは、単なる個人的な創作の軌跡ではなく、エリザベス朝国家の政治的・宗教的課題に対する知的実践の一部として位置づけることが可能なのである。彼の作品は、パトロンとの関係性、政治的

忠誠と信頼関係、そして情報操作の文化的表現が交錯する場において生み出されたものであり、その背景には、諜報活動と文学が密接に結びついたエリザベス朝の知的風土が存在していたと考えることが重要である。

1576年にケンブリッジ大学を離れた後、スペンサーは短期間、ロチェスター司教ヤング(John Young)に仕えていた。しかし、1577年から1578年には、いち早くレスターの勢力圏へとその身を移し始めていたと考えられる。この移行には、ケンブリッジ時代の知己であり、レスター伯の知的同盟者とされるハーベいの支援があった可能性が高い(McCabe 2017, p.25)。

周知のとおりスペンサーの政治的・文学的キャリアにおける決定的な転機は、1579年の『羊飼いの暦』の出版によってもたらされた。この作品は、レスター伯の甥であるシドニーに献呈されており、スペンサーを宮廷におけるシドニー=レスター派の文化的・政治的ネットワークに結びつける詩的表象として機能している。作品に付された「E.K.」による献辞は、スペンサーをシドニーの庇護下にある新進詩人として位置づけるとともに、彼の政治的・文学的忠誠心を公に示す役割を果たしているのである。

このように、スペンサーの初期経歴は、文学的創作と政治的連携が密接に絡み合うエリザベス朝の宮廷文化の中で形成されており、彼の詩的实践は、単なる芸術表現を超えて、政治的忠誠と情報戦略の一端を担う知的活動として位置づけることができる。

たとえば『羊飼いの暦』を、レスター伯のプロテスタント主義と、エリザベス朝統治に不可欠な「警戒」の実践に共鳴する主題を体現する作品として位置づけることは可能である。スペンサーの牧歌的分身である Colin Clout は、腐敗と偽りの助言に対する嘆きを繰り返し表明し、共同体の道徳的番人としての詩人の役割を象徴しているという風に。

特に「十月」の牧歌においては、詩人が国家の守護者であると同時に批評者として描かれ、詩人の「警告」や隠された助言を通じて統治者を導く責任が強調されている。この構図は、詩人が単なる文学的創作者ではなく、政治的忠誠と批判的知性を兼ね備えた存在として機能することを強く示唆しているのである。

このように、『羊飼いの暦』は、エリザベス朝の政治的・宗教的状况に対する詩的応答であり、と同時に、スペンサー自身を国家のイデオロギー的枠組みに参与する知的エージェントとして位置づけることを可能にする作品である。

さらに『羊飼いの暦』におけるその寓話的表現は、エリザベス朝の諜報活動において用いられた暗号と構造的に類似するものである。スパイが信頼できる政治家や役人に情報を伝える際、暗号文や隠喩的表現を用いたように、スペンサーの牧歌は鋭い政治批判を牧歌的な寓話のベールに包み込み、洞察力のある読者にのみその真意が伝わるように設計されているとすることができる。

このような戦略により、『羊飼いの暦』はスペンサーの文学的デビュー作であると同時に、レ

スター伯の標榜するプロテスタント主義への忠誠を暗示する詩的宣言としても機能した。作品に込められた警戒、忠誠、そして道徳的批評の主題は、スペンサーを国家の警戒と道徳的指導のニーズに応える詩人として位置づけるものであり、彼の文学的实践がエリザベス朝の国家統治における情報戦略に深く関与していたことを示唆しているものである。スペンサーの詩的言語は、国家の安全保障と宗教的秩序の維持に寄与するという観点からも再評価されるべきだろう。

先にも記述したとおり、レスター伯の庇護の下、スペンサーの政治的・行政的キャリアは大きな成果をもたらすことになる。1580年、スペンサーはアイルランド総督グレイ卿（Arthur Grey of Wilton）の秘書官に任命されるが、この人事自体がレスター伯の政治的影響力に大きく依存していたことは注目に値する（McCabe 2017, p.25）。スペンサーはこの任命を通じて、レスター伯の統治理念の延長線上にある植民地支配と諜報活動の交差点に立つ役割を担うこととなった。

当時のイングランドは、アイルランドの反乱とカトリック勢力の抵抗に悩まされており、エリザベス朝政府にとっては、アイルランドは監視と統制の実験的空間ともいえるものであった。スペンサーが従事していたであろう報告書、書簡、公式覚書の起草といった日々の行政業務は、エリザベス朝の政治に浸透していた諜報活動と密接に結びついており、彼の職務は単なる文官としての業務を超えて、国家の情報管理と思想統制の実践に関与するものであった。

ところでスペンサーとウォルシinghamとの間に、直接的な政治的あるいは個人的な関係を示す明確な証拠は現存していない（Hadfield 2012, p.244）。しかしながら、1580年にアイルランド総督グレイがウォルシingham宛に送った書簡の筆写を、スペンサーが秘書として担当したとされる事例は注目に値する（p.244）。この事実は、スペンサーがウォルシinghamの政治的活動に間接的なながらも関与していた可能性を示唆しているからである。

当時、ウォルシinghamは、自身の広範なスパイ網を通じてアイルランド情勢に強い関心を寄せていた。特に、カトリック勢力の動向や反乱の兆候に対する情報収集は、イングランドの安全保障政策において重要な位置を占めていた。スペンサーによる書簡の筆写は、彼が単なる詩人としてではなく、政治的文脈においても一定の役割を果たしていたことを示すものであり、彼の文学活動と政治的現実との接点を考察する上で重要な資料となるだろう。

このように、スペンサーとウォルシinghamの関係は、レスター伯を介した間接的なつながりに加え、アイルランド統治に関する実務的な場面においても交わっていた可能性がある。スペンサーがレスターの政治的ネットワークに組み込まれたことは、詩人としての活動と行政官としての職務の両立という二重の役割の始まりを意味していたのである。初期の詩作によって文学界における庇護を受ける一方で、レスターの政治的影響力によって政府機関への出向も確保されたスペンサーの経歴からも、レスター家が文筆と国家の両方に奉仕できる人材の育成の場として機能していたことがわかる。詩、プロパガンダ、諜報活動の境界が曖昧化されるこの文化的状況の中で、スペンサーはエリザベス朝国家の知的エージェントとしての地位を確立していったのである。

る。

4. パトロン制度と諜報ネットワーク

ケンブリッジ大学の教育が、詩人とスパイという二重の役割を可能にする技能－修辞学、言語、神学など－を授けたとすれば、パトロン制度は、そうした人材をエリザベス朝国家に結びつける忠誠のネットワークを提供する制度的枠組みであったと言える。

ウォルシinghamが構築した諜報機関は、公式の官僚機構よりも、忠誠心、義務感、そして個人的な推薦に基づく非公式なネットワークに依存していた。この意味において、パトロン制度は単なる財政的支援の手段ではなく、政治的相互信頼性を生み出し、維持するためのメカニズムとして機能していた。諜報員がしばしば大きな個人的リスクを負って活動していたことを考慮すれば、ウォルシinghamにとって「信頼」あるいは「忠誠」は最も価値あるものであったと言えるだろう。

エリザベス朝における諜報活動は、近代的な情報機関の理想像とは大きく異なる様相を呈していた (Archer 1991, p.4)。専属の情報機関が存在していたわけでも、体系的に組織化されていたわけでもなく、むしろ個々のパトロンによる庇護と、それに対する忠誠関係やさまざまな形の報酬の授受に基づいて運営されていた (p.5)。女王エリザベス 1 世は、有力な廷臣に対して名声や権威を授与することで彼らを掌握し、その見返りとして情報の提供を受けていた (p.5)。

このような構造のもと、レスター伯やウォルシinghamといった廷臣たちは、自らが雇用したクライアントから得られる情報を、単なる報告としてではなく、自身の政治的活動に積極的に活用していた。彼らの諜報活動は、国家の安全保障という目的に加え、個人的な権力基盤の強化や政治的駆け引きの手段としても機能していたのである。

エリザベス朝において、宗教、軍事、商業といった国家活動が拡大するにつれ、スパイとそのネットワークは国家運営において不可欠な存在となった。特に宮廷においては、廷臣や外交官が諜報活動を兼任することが一般的であり、情報収集と政治的駆け引きが密接に結びついていたのである。

中でも、秘書長官の地位にあったウォルシinghamは、イングランドの外交および内政の両面において、あらゆる動向を把握する必要があり、自らの諜報網を駆使して陰謀の防止、さらには陰謀の企図にまで関与していたと考えられる。彼の活動は、国家の安全保障を担保するのみならず、個人の政治的優位性を確保するための手段でもあった (Bezio 2023, pp.3-4)。

宮廷における情報収集の手段としては、忠誠心の確保、パトロンによる庇護、血縁や婚姻を含む近親関係、さらには性的操作など、多様な人間関係が活用された。これらの手段は、情報の入手を可能にするだけでなく、権力構造の中での地位を強化するためにも用いられていた (pp.3-4)。

スペンサーの初期キャリアは、詩がこうした信頼のネットワークにおいて、いかに有効な手段となり得たかを示している。例えば『羊飼いの暦』には、レスター伯の仲間への忠誠を示す献辞や賞賛の言葉が盛り込まれており、スペンサーは文学的野心をパトロン制度の枠組みに組み込むことで、自らを忠実なプロテスタントの下僕、王室とそのイデオロギーを守るために頼りにされるべき人物として位置づけた。このような献辞あるいは賞賛の言葉は、単なる文学的慣習を超えた意味を持ち、信頼される人物として認められることを求める、暗号化された要求とも言える。それは、諜報文化において交わされる忠誠の誓いの詩的な類似物であったと言えるのである。

ウォルシンガムがパトロン関係や血縁を通じて諜報員との絆を育んだように、スペンサーは詩的献辞を通して、警戒心と忠誠心によって特徴づけられるプロテスタントのネットワークに自らを組み込んだ。シドニーもスペンサーも、レスターの広義の庇護のもとで機能しており、レスター伯の邸宅はプロテスタント主義、軍事計画、そして秘密裡の活動の拠点であった。

この観点から見ると、詩人、廷臣、そして諜報員の境界は曖昧になり始める。ただ、いずれの役割も、国家に奉仕する集団の中で培われた信頼に依存していたのである。

5. 最後に：諜報社会におけるアレゴリーの意義

教育制度やパトロン関係といった制度的枠組みを超えて、スペンサーの文学作品は、秘密主義、忠誠心、そして政治的警戒心を重視するエリザベス朝の文化的精神を深く反映している。この時代において、詩は単なる芸術形式ではなく、イデオロギー的・政治的意味を担う媒体であり、特にアレゴリー（寓意）は、信頼できる読者には知識を伝えつつ、外部の者にはそれを隠蔽する手段として機能した。この戦略は、諜報活動における暗号化されたコミュニケーションと類似している。

スペンサーの代表作『妖精の女王』は、文学と諜報社会の融合を如実に体现している。作品内には、美德、警戒、そして二面性を象徴するアレゴリー的な人物像が多数登場し、騎士と怪物、偽りの英雄、裏切り者の廷臣といったキャラクターは、カトリックの陰謀、反乱、そして忠誠の脆弱性といった当時の政治的不安を寓話的に表現している。

スペンサーのアレゴリーは、プロテスタント・エリートのイデオロギー的「サークル」に属する読者には理解可能である一方、外部の者には解読困難な構造を持ち、ウォルシンガムのエージェントが流布した文書と同様に、暗号化された情報伝達的手段として機能していたのである。スペンサーは重層的な物語構造と修辭的な間接表現を駆使することで、読者に多層的な意味の解釈を促し、暗号文の読解に求められる認知的能力を要求する。彼の詩的技法は、警戒心を示す手段として機能し、微細なシグナルを読み解く能力を持つ読者に報いると同時に、忠誠心、慎重さ、そしてイデオロギーへの忠実性という規範の強化を読者に求めずにはいない。

この意味において、詩と諜報活動は構造的に共通点を有している。両者は、情報の隠蔽、洞察

力のある受容者の育成、そして注意深く構成された形式を通じて価値観－忠誠心、警戒心、道徳的判断－を表現する点で一致している。したがって、スペンサーの作品は単なる美的果実ではなく、エリザベス朝における諜報活動の文学的産物であり、また同時にエリザベス朝諜報文化風土の中で教育、政治、そして文学がいかに関わりあっていたかを示す重要な証左と言えるものなのである。

注

1) John Dee については Plowden (1991, p.111) に次のように記述されている。

The great Elizabethan magus, John Dee-chemist, astronomer, astrologer, mathematician and, some said, wizard- is thought to have assisted the work of the service on an *ad hoc* basis. He would certainly have been able to advise codes, while his extensive travels in eastern Europe offered useful opportunities for intelligence gathering.

参考文献

- Alford, Stephen. *The Watchers: A Secret History of the Reign of Elizabeth I*. UK: Penguin books, 2012.
- Archer, John Michael. *Sovereignty and Intelligence: Spying and Court Culture in the English Renaissance*. Stanford: Stanford University Press, 1991.
- Bezio, Kristin M. S. *The Eye of the Crown: The Development and Evolution of the Elizabethan Secret Service*. UK: Routledge, 2023.
- Hadfield, Andrew. *Edmund Spenser: A Life*. Oxford: Oxford University Press, 2012.
- Haynes, Alan. *Invisible Power: The Elizabethan Secret Services 1570-1603*. UK: Alan Sutton Publishing Ltd., 1992.
- Hutchinson, Robert. *Elizabeth's Spy Master: Francis Walsingham and the Secret War that Saved*. UK: Weidenfeld & Nicolson, 2006.
- McCabe, Richard. "Patrons." *Edmund Spenser in Context*. Ed. Andrew Escobedo Cambridge: Cambridge University Press, 2017. 23-32.
- Plowden, Alison. *The Elizabethan Secret Service*. England: Harvester Wheatsheaf, 1991.
- 和田勇一（監修・校訂）熊本大学スペンサー研究会訳『スペンサー 羊飼の暦』東京：（株）文理 1974